

經は萬年の外未來までもながるべし、日本國の一切衆生の盲目をひらける功德あり、無間地獄の道をふさぎぬ、此の功德は傳教天台にも超へ龍樹迦葉にもすぐれたり云々身輕法重死身弘法の大慈悲の菩薩とは、誰を云ふのであろうか、法然親鸞等の誑僧は比もつかず、天台傳教すら今の御聖文に依つて知れるであらう、獨り聖祖を除いては末法の導師と仰ぐものはない、直に聖祖は宗教家の本領である『以慈修身善人佛惠』を色讀された導師である、眞なる哉、師孝の日朗上人を造つたのも大信行の四條金吾を作つたのも、皆其の慈悲に感泣し、如何なる悲境に沈淪することも、決して身命を省みあかつたことは、自然の結果と云ふべきである、現時宗門の彼は如何に、眞摯に聖祖の慈悲に感泣するもの果して何程あるであらうか。

(をばり)



詞藻

## 初夏の小吼

太田純志

『我門家夜斷<sub>レ</sub>眠、晝止暇案<sub>レ</sub>之、一生空過萬歲勿<sub>レ</sub>悔』と嚴なる哉聖訓、尊い哉金言、豈に夫れ服膺せずして可からんや、

時今、榴花碧を燃し梅子正に熟せんとするに當り、北窓午睡に逸せんか、將、吾人の小吼を以て『蛙鳴青草泊蟬噪垂揚浦』とせんか、夫れ狗にして人衣を服するも誰かこれ人なりと云はん、猿にして人冠を頭にするも誰かこれ廟堂の人ありとやせん、現時衆俗圓頂と長袖を見て無用の長物と輕賤す、一理あらん、妙樂大師云へるあり

『像末清燒信心寡薄圓頓教法、溢藏盈函、不暫思惟、便至瞑目、徒生徒死、一何痛哉』と近時各

宗蒞微として振はず、自ら範とかり俗界指導の任に居しつゝ、一切の施設運用遠く彼俗界の活動に及ばず、常に后塵を拜して相距ること數等、之れ何が故ぞ、一度東西古今の竹帛を繙かんか、草莽の匹夫一呼して起ち忽にして三軍の將とあり、六國の宰相となる、時勢は聖賢を生み、英雄偉人を出す、噫、現代は如何、一義を執て十年を越ることも理想の現實は難し、然りと雖も、吾人終日竟夜學々吸々たるは何ぞ、權勢か、榮達か、金錢か、得意か、名譽か、

昔は聞く、常啼は東に請ひ、善財は南に求め、藥王は臂を焼き、普明は頭を刎らるゝと、然るに吾人は座ながらに曇花盲龜も及ばざる、唯一佛乘に値遇しつゝ、豈に悠々然ある可けんや、大自然の佛意は人爲を通して現はれずば將た何れにか其の發現を見得ん、佛法の興隆は只、遺弟の念力によるの外なし、宇宙の眞理は妙法に存す、念力の發現は信仰に有り、信仰は無上の活力なり、

宗祖曰『法王ノ宣旨背キ カタケレバ任ニ經文ニ

權實ニ教ノイクサヲ起シ忍辱ノ鏡ヲ著テ妙教ノ劍ヲ提ゲ、一部八卷ノ肝心妙法五字ノ旗ヲ指上テ、未顯眞實ノ己ヲハリ正直捨權ノ箭ヲハゲテ、大白牛車ニ打乗テ、大白牛車ニ打乗テ權門ヲカツバト破、カシコヘオシカケコ、ヘオシヨセ、念佛眞言禪律等ノ八宗十宗ノ敵人ヲセムルニ、或ハニゲ或ハヒキシツゾキ或ハ生取ラレシ者ハ我弟子トナル或ハセメ返シセメオトシスレドモ、カタキハ多勢也法王ノ一人ハ無勢也至レ今軍ヤム事ナシ』文詮ずる所は天もすて給へ、諸難にも遇へ、黃金の勢力、俗權の猛威、時代の群論、果して之れ何物ぞ、不懷金剛の一大信仰の前には紛々として黃塵の如し、衆愚の喃喃、もとより一顧の價だに吝し、乞ふ恕にせよ、一讀、幸にして高樓の曉鐘たれば。

